第 84 回観光立国セミナー・講演抄録（2013.1.11）　於 麹町海事センター

世界遺産を旅して ～その裏側を探る～

エッセイスト・旅行ジャーナリスト
近藤　節夫

１．講義のポイントと視点

昨年６月、45 年ぶりに中東のヨルダンを訪れ、第３次中東戦争直後で戒厳令下の首都アンマン市内でヨルダン軍に身柄拘束された当時の現場に立ち、改めて戦争の厳しかった様子を思い起こしながら検証してきました。その途次、世界遺産・ペトラ遺跡や当時敵対国だったイスラエル、そしてパレスチナ自治区、死海などを覗いてきましたので、周辺の世界遺産を含めて私自身興味を持っている世界遺産や、お薦めしたい世界遺産について、パワーポイントで説明しながら、いろいろな視点からお話したいと思います。

最初に世界遺産登録のきっかけとなった、ナイル沿岸の古代遺跡であるアブ・シンベル神殿保存活動の経緯について述べたいと思います。同時に古代の天文学の智恵ということについて、アブ・シンベル神殿とメキシコのユカタン半島にあるチチェン・イッツァを例にお話したいと思います。

そして、私がこれまで訪れた166か所の世界遺産の中から、ぜひ皆さんにも訪れていただきたいと思った文化遺産と自然遺産をご紹介致したいと思います。

その他に、世界遺産と同様に、最近脚光を浴びている「新・世界7不思議」についてもお話したいと思います。その昔古代の多くの遺跡の中から価値ある建築学的遺産としてリスト・アップされた、「世界7不思議」というものがありました。しかし、現存するのはエジプトのピラミッドだけとなりました。そこで「7」という数字にこだわって 2007 年7月7日に「新・世界7不思議」が選定されました。世界中から投票によって選出され、公に承認されましたので、それについてお話したいと思います。

最後に多彩なタレントであるビートたけしが、7年間続けていたTV番組「ビートたけしの世界7不思議」をご紹介したいと思います。

さて、冒頭タイトルに描かれたスライド画面のベネツィアは、皆さんご存じのイタリアのベネツィアです。イギリス人シェイクスピアの「ベニスの商人」で英語標記が過度に PR されたせいでしょうか、ベニスという呼称が非常に多いのですが、正しい現地語はベネツィアです。文部科学省の指導でも外国語の標記は現地語に則るということになっていて、ベニスは全部ベネツィアと記されます。

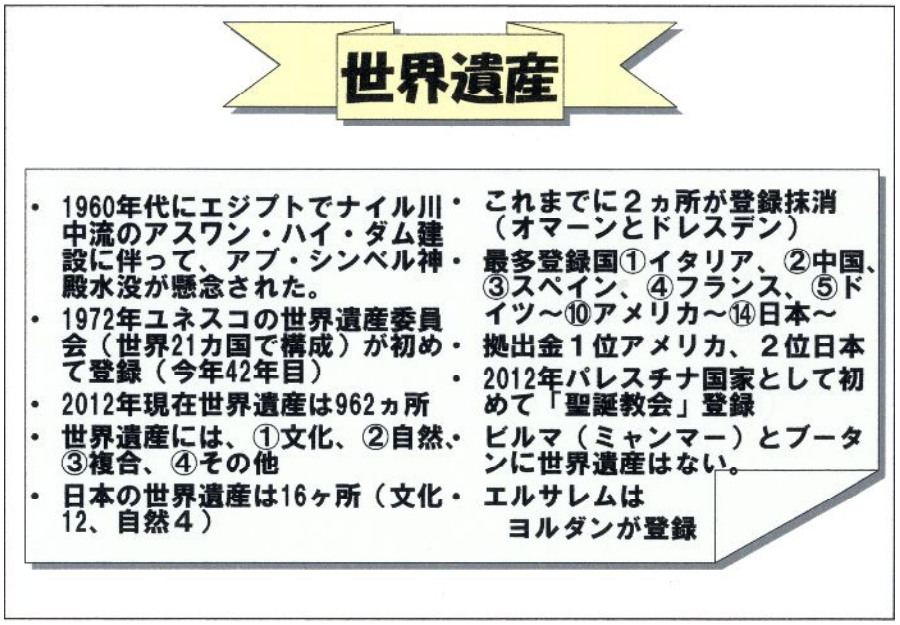
従って、この「光降るベニス（春）」の地名は正しい標記ではありません。この絵は柳沢正人さんと仰る東京芸大出の画家が描いたものです。昨年の夏箱根の成川美術館の展示会で買い求めた絵葉書からスキャンしたものです。もう1枚のまったく同じ構図の絵もこの方の描いたものです。こちらのタイトルは、「光降るベニス（夏）」です。

２．世界遺産とは？　登録のきっかけと現状

この（ライトアップされた）スライド画面は、世界遺産でも壮大な古代建造物として有名なポン・デュ・ガールです。フランスのプロヴァンス地方最大の史跡で、近くへ寄ってみるとそのあまりの広大さと迫力に驚き、畏敬の念さえ憶えます。これは3層になっていますが、この一番下の橋脚の高さだけで 22mあります。2段目の高さが 20mです。3階が7mあります。川面からこの一番上部の第三層まで 50m近い高さになります。これは古代ローマ時代に敷設された水道橋で、ここから約 50 km 離れた、やはり世界遺産であるニームの街へ生活用水を送っていました。B.C.19 年に完成したものですが、これだけの大工事を完成させた古代の人はつくづく偉いなあと敬服致します。

形のあるものはその場所を訪れて初めて分かるように、その場で身体全体が圧倒されるような威圧感に似た臨場感を感じることこそが大切であると思います。そうしますと、昔の人たちが生活していた社会の空気、生活感覚、そして古代人のものの考え方までが、身体全体で実感として分かってくるような気が致します。

18 世紀の哲学者ジャン・ジャック・ルソーはこの巨大な水道橋を目の前に、「自分はここへ来て、なぜ自分はローマ人に生まれなかったのか」と嘆きつぶやいたと言われているくらい、スケールの大きい素晴らしい古代の建造物です。



・世界遺産登録のきっかけ

そもそも「世界遺産」という保護・登録システムが制定されたのは、1960 年代にナイル川でアスワン・ハイ・ダム建設工事が始まったことがきっかけでした。当時エジプトは、王政を打倒した英雄ナセル大統領の時代でした。私が初めてエジプト（当時シリアとともにアラブ連合共和国を結成）を訪れた時、ナセルはアラブ連合大統領の座にあり、日本でも「為せば成る、ナ

セルはアラブの大統領」というジョークが囃されたほどその存在感は強大なものでした。
ダム建設工事でナイル川の水をせき止めた結果水位が上がりました。そのためにナイル沿岸のアブ・シンベル神殿など貴重なヌビア遺跡が水没する恐れが懸念されました。その時、これら人類共通の財産を救うべきだという声が世界中から澎湃としてわき上がりました。その強い国際世論を受けて貴重な人類共通の財産を守り抜くとの決意の下に、ユネスコに世界遺産委員会が発足し、1972 年初めて第1号世界遺産が登録されたのです。

・962 か所が登録されている世界遺産、日本には 16 か所

世界遺産は、文化遺産、自然遺産、複合遺産に大別され、同時に危機遺産という特殊な区分けの呼び方をするケースもあります。昨年までに登録された世界遺産は 962 か所あります。加盟国の中でアメリカが一番多額の資金拠出をしています。そのお陰とは思いませんが、アメリカには登録数が意外に多いのです。ただ、アメリカの場合は、多いのは文化遺産よりも自然遺産です。非常に国土が広大ですから、多種多様で大規模な国立公園が数多くあります。
日本には現在世界遺産は 16 か所あります。皆さまには、せめてこのうち半分くらいは訪れていただきたいというのが、わたしの個人的な希望です。

・政治がからんだ特殊なケース ― パレスチナ自治区・聖誕教会

政治がからんだ特殊なケースとして、昨年パレスチナ自治区・ベツレヘムにあるイエス・キリストが誕生した聖誕教会が世界遺産に登録されました。ところが、これが今新たに政治的な物議を醸しています。パレスチナ自治区というのは現在国連の加盟国ではありません。その時点ではオブザーバー組織というものでした。現在はオブザーバー国家に格上げされましたが、正式な国連加盟国ではありません。それにも拘わらず国連加盟国ではない領土にある聖誕教会が、国連の傘下にあるユネスコの世界遺産に登録されたわけです。
現在世界遺産委員会にはパレスチナも加盟しています。世界遺産委員会は上部組織の国連が承認する以前にパレスチナ自治区を認めていました。しかし、国連ではノーという状態ですから複雑な問題となっています。翻って日本は、こういう点では結構感度も鈍く対応も遅いんです。日本が世界遺産条約を結んだのは、締約国の中でなんと 125 番目です。

・世界遺産条約を結んでいない国、ミャンマー

世界遺産がありそうでないのが、ミャンマー（ビルマ）です。理由は世界遺産条約を結んでいないからです。国連の加盟国ですが、世界遺産条約を結んでいません。そのために世界遺産が1つもありません。

３．世界遺産を視点を変えて見れば

世界遺産を見学しますと本当に昔の人のエネルギーというか、知恵というか、或いは気軽に

触れることが出来ない文化や自然に触れた時、心を打たれます。ぜひ、出来るだけ数多くの世界遺産を訪れて欲しいと思います。

出来れば、1つの文化遺産を時間や、視点を変えて見てみるということをお薦めしたいと思います。

その一例としてエジプトのピラミッドをご紹介します。あの広い砂漠の中で夜間に行われるオプショナル・ツアーのひとつに「ライト・アンド・サウンド」があります。静寂な砂漠の星空の下でピラミッドに幾条ものカラー光線を当てて音楽を流します。これが何とも言えない神秘的なムードを醸し出します。そこにいる人々は視覚と聴覚で感じるアートの雰囲気にすっかり魅了されます。ロマンチックな夜の砂漠で素敵なショーが演出され、楽しむことが出来るのです。このように時間帯を選んで特殊なスポットへ行ってみることも旅を楽しむ一つの方法です。

また、こんなことも発見します。1人で旅をすると、日本語でガイドしてもらうケースはほとんどありません。エジプトなどに行きますと、観光客が世界中から訪れるため、ガイドさんが多国語、バイリンガルで解説してくれます。しかし、どうやってガイドする言葉を選ぶのでしょうか。例えば、何語で話したら良いのか。参加者に挙手させるのです。まず、英語は問題ないから、「English！」と言うと次から次へ「French！」「German！」「Italian！」という具合に、ツアー参加者が積極的にサーッと手を上げ話して欲しい言葉をせがみます。そうしますと、じゃあそれ以上は駄目と言ってガイドする言語を3つくらいに絞ります。それ以上やっていると、同じ説明をいろいろな言葉で話すわけですから時間がかかってしょうがない。そういう雰囲気も面白いです。ですから、英語もある程度分かったほうが楽しめるということです。

そして興味深いのは最初に切り出す英語です。エジプトの観光地ではほとんど‘About 5,000 years ago’で始まります。遺跡のどこへ行っても、みんな‘About 4,000 years ago’以前の話です。それだけ古代遺跡では歴史的、考古学的価値がある内容が語られるのです。聞いていて唸るような話ばかりですから、ぜひそういうところに何度も何度も足を運んでいただきたいと思います。そうすると、常に「なぜ？」という疑問がわいてきます。

また、私の個人的な体験や要望ばかりで恐縮ですが、この世に生を享けて世界遺産を訪れないと絶対損をします。最近日本人の平均寿命は男性 79 歳、女の人は 86 歳と言われていますが、自分の意思で自由に動ける時期というのは精々その半分くらい。その間にぜひ訪れていただくといいですね。海外の世界遺産も最低でも5～10 ヶ所くらいは訪れていただきたいと思います。

４．世界遺産登録を抹消された２つのケース

・アラビア半島のアラビア・オリックス保護区

これまでに登録を抹消された世界遺産は2か所あります。ひとつは、アラビア半島のオマーンに生息するアラビア・オリックス保護区です。この土地だけにしかいない絶滅危惧種の動物が、このアラビア・オリックスです。角を巻いたヤギの化身みたいな動物です。実は、この保護

区が登録されてから、オマーン政府は石油を掘削するために保護区をどんどん縮小しました。そのためこの動物が急激に減ってしまいました。世界遺産委員会がアラビア・オリックスを保護しないなら登録を抹消するぞと警告しても、お金に目が眩んだオマーン政府はまったく気にも留めず石油掘削地域を拡張して、アラビア・オリックス居住保護地域を狭くしてしまいました。そのため世界遺産委員会は、2007 年止むを得ずその登録を抹消しました。

・戦災から復興なった旧東ドイツのドレスデン

もうひとつのケースは、発展途上国ではありません。旧東ドイツのドレスデンです。ドレスデンは第2次世界大戦で市街が完膚なきまでに破壊され、戦後見事に復興して昔の姿を取り戻した由緒ある都市です。この都市がなぜ抹消されたかと言いますと、市内を流れるエルベ川に橋をかけることになったからです。その美観が損なわれることが危惧され、世界遺産委員会は何度かドレスデン市に警告しました。市は警告を受けて住民投票に委ねました。しかし、その結果、市民の意見はこれ以上の交通渋滞は忍び難く新設される橋は生活上どうしても必要で、この際登録抹消も仕方ないという結論になり、残念なことに 2009 年登録が抹消されました。その決定までに猶予期間を設け世界遺産委員会は橋の代わりに地下道を建設するよう何度も市当局を説得したのですが、その地下道建設にかかる費用があまりにも膨大で、それも難しいことが分かり、結局橋を建設することになり登録は抹消されてしまいました。

・登録抹消が懸念される世界遺産

日本でも「紀伊山地の霊場と参詣道」の参詣道傍に建てられている、多くの杭が問題になりそうです。アレックス・カーという名著「犬と鬼」を書いた日本在住のアメリカ人東洋学者がいますが、たまたまカー氏の講演を聞いた時、こんな話をしてくれました。本堂にいく途中の参道の杭は、元来木造でしたが、今は一見して本物に見える木造風コンクリート製になっているそうです。その偽造？が見つかってしまったようです。

オリジナルなものを損壊してはいけないことになっていますから、その理念は当然守るべきではないかと思います。

他にも登録抹消が心配されている世界遺産がいくつかあります。代表的なところとして、サンクト・ペテルブルグや、ケルン、リバプールなどがあります。これら伝統的な3つの都市は、同じように近年の高層ビル建設計画により景観が損なわれるという点で問題視され、今悩んでいるところです。他には、ブラジルの首都・ブラジリアがあります。しかし、ブラジリアは取り消されても止むを得ないと考えているようです。と申しますのは、ブラジリアは途上国の首都ですから、これから国が大きく発展していくためには都市化は避けられないと達観しています。保護や抹消についてはいろいろな考え方があると思います。

私もイェロー・ストーンの自然保護に関する感想を「NATIONAL GEOGRAPHIC」誌 2006 年 12 月号に寄稿しました。

５．複雑な世界遺産の帰属問題

・エルサレム周辺の世界遺産

複雑で難しいエルサレム周辺の世界遺産の帰属問題についてお話致したいと思います。

冒頭お話しましたように第３次中東戦争直後にアラブ諸国へ参りましたが、その戦争でイスラエルはヨルダン川西岸、エジプトとの境界にあるガザ地区、そしてシリアのゴラン高原を占領しました。イスラエルはこの３地域を第３次中東戦争の戦利品として占領し、その占拠状態は今日も続いています。

それらの地域では占領地の一部が新たに入植地となり、今もイスラエルが実効支配しています。微妙なことにイスラエルとヨルダンの境界線上にエルサレムがあります。特に東エルサレムは、第３次中東戦争前まではヨルダン領でしたが、戦争の結果イスラエルが東エルサレムを占領してしまいました。東側にはユダヤ人にとって父祖の魂の篭った「嘆きの壁」や「黄金ドーム」のような由緒ある聖地が数多くあります。従って、イスラエルには一旦取り戻した父祖の地を返還する気持ちはまったくありません。問題はイスラエルによって実効支配された現在の状況にも拘わらず、エルサレムが以前領有していたヨルダンによって世界遺産に登録されたという厳然たる事実です。

・パレスチナ自治区・ベツレヘムの世界遺産、聖誕教会

もう一つはパレスチナ自治区のベツレヘムにある世界遺産・聖誕教会です。エルサレムから少し離れたところにありますが、自治区の周囲には金網が張り巡らされ、パスポートを見せて、ボディ・チェックを受けて入国します。車もパレスチナ・ナンバーの車に乗り換え、ドライバーとガイドもパレスチナ人に従うという原則になっているようですが、この点のチェックは若干甘いようです。

この聖誕教会のあるパレスチナは、前述のように国家としては国連が承認していません。ところが、パレスチナはユネスコに加盟していて世界遺産委員会にも加盟しています。それでパレスチナは聖誕教会を世界遺産委員会に登録申請して承認され、昨年正式に世界遺産として登録されました。この登録に対してイスラエルとアメリカが猛然と反発し、アメリカは直ちにユネスコへの拠出金を凍結してしまいました。アメリカは最大の拠出国です。その結果、今では日本が最も多く基金を拠出しています。アメリカが怒りを収めれば、また元の鞘へ収まるとは思います。

エルサレムは先ほど申し上げましたように、現在はイスラエルが実効支配していますが、被占領国のヨルダンによってこのエルサレムが世界遺産に登録されました。従って、現在ではエルサレムはヨルダンの世界遺産ということになっています。実はイスラエルの知り合いのガイドさんに、この問題についてメールで尋ねました。ガイドさんは「ヨルダンの人にとってはエルサレムはヨルダンのものと言っていますが、イスラエル人はイスラエルのものだと思っている。でも、ヨルダンがもう申請してしまったからしょうがない。一応イスラエルも権利は留保して

いる」と、こういう感じなのです。いつまでたっても紛争地域の帰属権というのはややこしいものです。

・ミャンマーのパガン遺跡

このパガン遺跡は、世界遺産に匹敵する価値があるにも拘わらず、先ほど申し上げた理由で世界遺産ではありません。パガン王朝は、12 世紀から 13 世紀にビルマの中部で栄えた王朝ですが、今では管理が行き届かず近所の子供たちがよじ登ってレンガを投げ破損してしまうようなことがあります。しかし、どこまでも続く広野に高層ビルやネオンはまったく見られず、空気が非常に澄んでいて紺碧の空が突き抜けるようです。少し高いところに上りますと、夕焼けの真っ赤な景色が素晴らしく、いつまでその場に留まっても飽きません。このパゴダとこの周辺の雰囲気のマッチングが実に素晴らしいですね。世界遺産条約を早く締結して、一日も早く世界遺産に登録して欲しいものです。

６．不思議な仕掛けと裏話

・アブ・シンベル神殿

アブ・シンベル神殿に話を戻します。この遺跡が元々世界遺産を作ったきっかけです。ナイル沿岸の神殿を持ち上げる大プロジェクトでした。どのくらい持ち上げたかと言いますと高さにして 60mです。普通神殿をそのまま持ち上げることはとても出来ません。岩石を全部小さく分解したのです。岩の断片の１つ１つを奥のほうで積み上げて再び同じ神殿を作る。210mくらい押し込んだ場所に移築しました。

アブ・シンベル大神殿の手前の方にあるのは小神殿で、これはお妃のための神殿です。移

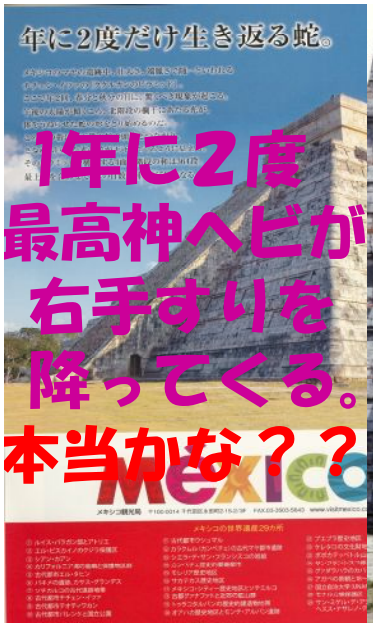
築のうえ再建されましたが、はっきり言って大神殿はハリボテです。分かり難いようですが、よく細かいところを見ると、手前の手すりのところなどでなんとなく分かります。

ここで古代人の天文学知識のすごいところを明かしたいと思います。このスライドはアブ・シンベル神殿の正面の図です。この奥の突き当たりに4体の像があります。右から2人目の像が神殿を造営したラムセス2世で、エジプト人からは神様のように崇められています。この4体に太陽光が真正面から当たる日が、1年に2日あります。しかし、不思議なことに、一番左の神様「ブタハ」、冥界の神様だけに光が当たらず隠れてしまいました。「ブタハ」は冥界神だから隠れてもいいように思いますが、移築する前は陽の光が当たっていました。移築によって微妙にずれてしまったのです。現代の精巧な技術をもってしても、必ずしもオリジナル通りにはいきません。この点が最大のウィーク・ポイントです。

年に2日というと、普通は春分の日とか秋分の日というのが一般的です。これはそうではなくて、ラムセス2世の誕生日である2月 22 日と、ラムセス2世が即位した日の 10 月 22 日です。アブ・シンベル神殿にはこういう大それた仕掛けが隠されていました。

・メキシコ・ユカタン半島のチチェン・イッツァ遺跡のカラクリ

これは 'CHICHEN ITZA' と綴られていて、現地ではリエゾンして「チチェニッツァ」と発音しています。マヤ暦の天文学の智恵を活かした史跡です。これはエジプトほど古くありません。西暦で 600 年から 900 年の間に、つまり奈良時代から平安時代にかけて造られたのではないかといわれています。



スライドでお分かりのように、大きなテラスのような階段状の石台が9つあります。縦面と横面になっていますので、表面が全部合わせて9の2倍の 18 面になります。何を意味している

かと言いますと、マヤ暦の1年18ヶ月を表現しているのです。四方にあるこの小さい階段はそれぞれ90段です。90段がそれぞれ四方にあって360段です。そして、最上段の四方に1つずつあるから合わせて364段です。そして、その上に座布団のようにもう1つ乗って365段になります。18ヶ月は現代のグレゴリオ暦12ヶ月とはちょっと誤差がありますが、マヤ暦では1年が18ヶ月で、365日だったということを示しているのです。

正面の両端に石の手すりがありますが、太陽の関係で1年に2回、右側の手すりを最高神ククルカンという蛇神が下りてきます。アブ・シンベル神殿と違って、ここでは春分と秋分の日の昼過ぎに蛇の陰がこの手すりを下りて来ます。ほら出てきましたね。光の関係で、蛇が見えてきましたでしょ。これが頭です。こういう蛇の影というか、影をうまく利用した蛇神が地上に降りてきます。この仕掛けが、しかも暦に基づいて凝らされているから驚きます。

マヤ人の天文学説というのは、例えば1年は18カ月、1年の日数は365.242**0**日ですが、現代暦では365.242**2**日です。マヤ暦と現代暦とは僅かコンマ以下4桁目にやっと差が出ます。どのくらいの誤差かというと、1万分の2日ですから、1年でほんの17秒です。マヤ暦と現代暦の差が1年でたった17秒ということを考えても、マヤ暦がいかに精緻だったかということが分かります。

そこで、皆さん昨年マヤ暦で、何か怪しげな人類滅亡説が話題になったことを覚えておられると思います。現在マヤ暦は「第5太陽の時代」と言われていまして、マヤ暦の開始がB.C.3113年で、終わるのがその5125年後です。これを引き算すると2012年になります。その点から、昨年2012年12月21日に地球が滅亡し、人類が滅亡するという予言が話題になったのです。テレビや雑誌で広く紹介されました。信じない人が圧倒的に多かったようですが、信じる人も結構いて、半信半疑だったわけです。結局、予言にまつわるハプニングは何も起りませんでした。それにしても非常に正確な予言や暦には現代人もびっくりです。

・イスラエル・エルサレム

このスライドはイスラエルのエルサレムです。非常に丘陵の多いところです。そして、オリーブの木が多いところです。

これは有名な嘆きの壁です。この嘆きの壁に行くのにも、入口が3つか、4つくらいあります。ここに入るのはなかなか面倒です。やはりボディ・チェックを受けますが、最も厳しく検査されるのは、男性のベルトです。ベルトは全部外されます。イスラエルではどこへ行ってもベルトを外されるのです。税関を通るのでもなぜあんなにベルトにこだわるのか分かりませんでした。その理由はベルトに爆弾を巻きつけて自殺を図る自爆が警戒されているからです。

ちょっと珍しいのは男女を隔てる間仕切りです。男の人はあちらでお祈りし、女性はこちらです。男女が同室ということは、一般的にユダヤや、アラブの社会ではありません。

2000年も経つとみんな変わってしまいます。このスライドはゴルゴダの丘へ通じる巡礼の道です。ヴィア・ドロローサといいます。今では狭い道は大理石になって、両側ともお店が額を寄せ合うように並んでいます。ゴルゴダの丘にはイエス・キリストが磔にされた神聖なスポット、

聖墳墓教会があります。このスライドがゴルゴダの丘にある聖墳墓教会です。この入口から教会内へ入ります。中に入った時、ちょうどミサの最中でしたから、多くの人が訪れていました。参拝者の目的はこの祭壇の一点なのです。ここにキリストが磔になった十字架が立てられていました。あとから多くの参拝者が撫でたり触ったりするものですから、今ではピカピカになっています。皆さん跪いて敬虔な気持ちでお祈りしています。2000 年の昔でしたら丘の上で単に石ころが散らばっていた荒地が、今やこういった教会建築になって、内部はこのように立派になっています。

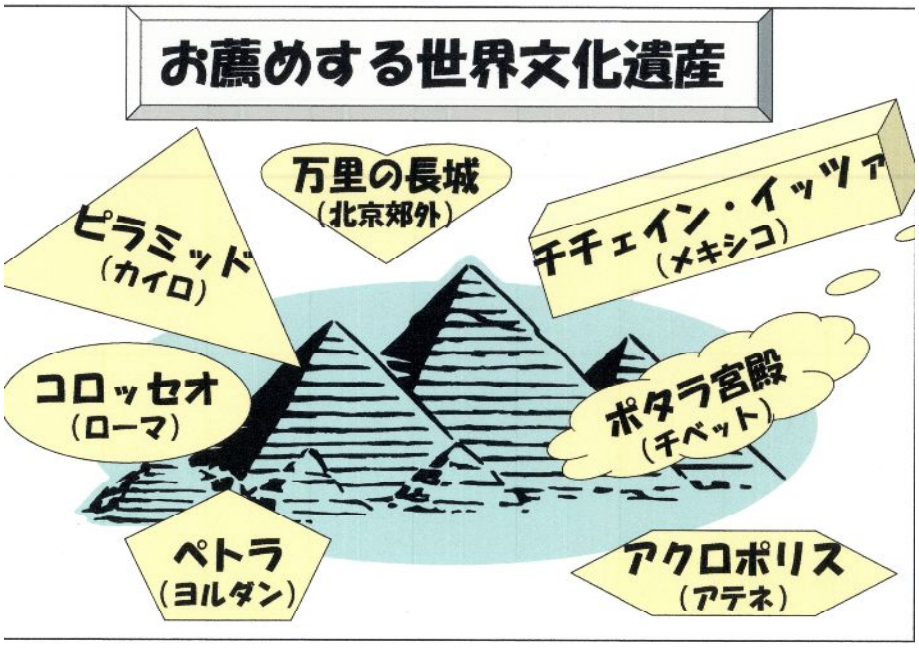
・パレスチナ自治区・ベツレヘム

次にパレスチナ自治区のベツレヘムです。エルサレムに近い自治区ですけれども、ここは賛美歌にもよく歌われます。これが周囲の景色です。これから聖誕教会の中に入ります。ここはイエス・キリストが生まれたところです。かつての厩、つまり馬小屋です。

キリスト教徒にとっては当然敬虔な気持ちになるらしく、手を合わせて、十字架を切っていました。この聖なる場所の前で立ち止まります。この通路幅が１mくらいなんですが、その反対側に何があるかというと、キリストが最初に産湯を浸かったところです。こういう元の厩が今や聖地となり、その挙句に去年この聖誕教会は世界遺産に登録されました。

７．お薦めしたい世界文化遺産

私は世界文化遺産として次の7ヶ所をお薦めしたいと思います。



まずは、カイロにある①**ピラミッド**です。特に最大のクフ王の大きなピラミッドが魅力的です。

しかも、今も残る「世界7不思議」のひとつです。2番目はローマの**②コロッセオ**です。これも実際に現場へ行ってみると分かるのですが、昔の都市というのは今よりも低いところにあったなあということが実感出来ます。ローマ時代の長い歴史が建物の壁に沁みこんだシミや傷跡がまた気に入っています。

次に**③ポタラ宮殿**です。中学生の頃に雑誌でこの絵を見てショックを受け、こんなすごい建物があるのかと思いました。ポタラ宮殿は長年の夢でしたが、6年前に初めて青蔵鉄道に乗って鉄道世界最高標高（5,072m）のタングラ峠を越えて行って来ました。改めてすごいなあと思いました。

ただ、首都ラサは海抜 3,650mの高地にあるため空気が薄く、お酒とタバコは控えるよう注意されます。飲料用の水を常に飲んで水分の補給を欠かさず、熱いお風呂は出来るだけ浸からないようにと、こういうなかなか滞在しにくい制約があります。ポタラ宮殿には今やかつての主、ダライ・ラマ 14 世はおりませんが、ダライ・ラマの部屋は執務室、寝室まですべて見せてくれます。現在は高台の宮殿から市街を見下すと、なかなか眺望が良いのですが、いずれ周囲に高いビルでも建って景観を壊してしまうのではないかと気になっています。

④チチェン・イッツァについては、このマヤ文明の世界遺産の裏話でご説明した通りです。

次に**⑤万里の長城**です。全長が 8,850 ㎞とされています。しかし、昨年6月中国政府は「万里の長城の長さは2万 1,000 ㎞」と公式に訂正しました。地球1周は4万㎞ですから、地球1周の半分より長いと公表したのです。ただ、今日実際に残っているのは 6,900 ㎞だそうです。昨年の 10 月、中国の連休時に、押しかけた観光客で溢れ長城の上は人が落っこちそうになりました。近年大勢の観光客が訪れ、狭い城の上は込み合って大変らしいです。40 年くらい前に初めて行った時は、観光客はほとんどいませんでした。それが今ではスライドの写真のような状態です。これではうっかりすると本当に長城から落ちてしまいそうです。

このスライドは**⑥アテネ・アクロポリスのパルテノン神殿**です。小田実の「何でも見てやろう」を読むと分かりますが、パルテノン神殿を見てヨーロッパに対するそれまでの小田のイメージが大きく変わったほど小田に衝撃を与えた古代ギリシャ時代の史跡です。

ここで**⑦ペトラ遺跡**についてお話します。ペトラ遺跡は TV などでも最近しばしば紹介されていますが、取り上げられているのはこの地図上の宝物殿です。昔はお墓だったのですが、今は宝物殿と呼ばれています。インフォメーション・センターから歩いて行きますが、ずっと砂地続きで、ここまで約2㎞近いです。疲れますので、どうしても歩くのが嫌な人は、馬車に乗るか、ラクダかロバです。昔ナバティア王国の首都だったところですから、昔の劇場跡とか、王様や貴族のお墓、庶民のお墓、倉庫、ローマ時代の建物や通りとかいろいろな遺跡があります。

メディアやガイドブックなどでは、こういうところをあまり詳しく紹介しませんので、観光客はここまであまり来ません。この辺りからずっと歩いて登りになり山に入ります。この行き着いたところが最終ゴールの修道院です。この間を往復しますと 10 ㎞近くありますから、疲れたら途中でのんびり待っていれば良い。

宝物殿前広場では夜になると定期的に光のキャンドル・ショーをやっています。音楽を流し

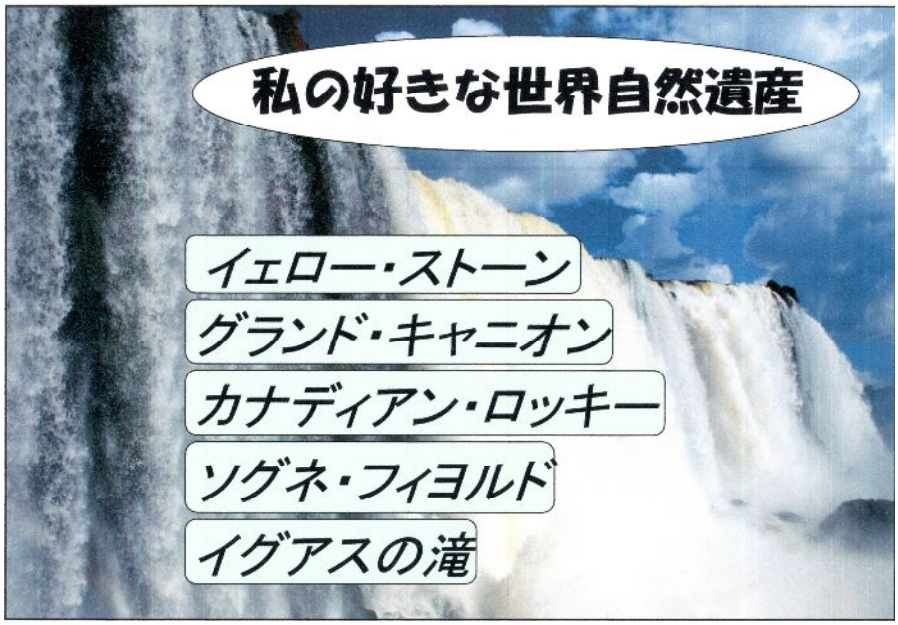
て、ランタンに火を灯す素朴なものですが、幻想的な光景を見せてくれます。これがなかなか洒落ています。ペトラ遺跡はぜひとも一度は訪れる価値のある世界遺産です。

８．お薦めしたい世界自然遺産

世界自然遺産の中で次の5ヶ所をぜひ訪れていただきたく、ご紹介したいと思います。

まず、アメリカの**①イエロー・ストーン国立公園**です。これは広大で、4つの州に跨っています。イエロー・ストーンは自然林、野生動物、豪快な滝、温泉地獄、間欠泉の噴き上げる推進力などを間近に見られるのが魅力的で感激します。間欠泉は決まった時間に観光客が座っている目の前でビューっとすごい勢いで吹き上げますから、これは楽しめますし、一見の価値があります。

イエロー・ストーンはグランド・ティートン国立公園に隣接しています。なぜグランド・ティートンの名を出したかと申しますと、実は、ここはハリウッド映画「シェーン」のロケ現場になったところです。憶えているでしょうか。ジョーイ少年が去り行くシェーンの背に、‘Shane！Come back to me.’と泣かす科白を言って、サウンド・ミュージックが静かに流れ、ジ・エンドとなる印象的な名シーンが思い出されます。



それから**②グランド・キャニオン**です。グランド・キャニオンは広大で、西海岸へ行くとオプショナル・ツアーがありますが、ラスベガスに泊まれば翌日セスナ機で容易に行くことが出来ます。いただけないのは、このスライド画面のように岩の上にせり出したガラス製のテラスを作り、眼下を覗けるような観光施設を作ってしまったことです。雄大な景色にそぐわない見苦しい仕掛けです。これは環境との調和を目指す世界遺産としては、ちょっと不釣合いではないかと思

っています。

③カナディアン・ロッキーは行かれた方もかなり多いと思います。出来れば、バンクーヴァーからジャスパー、さらにバンフまで VIA 鉄道カナディアン・ロッキー号展望車で旅行出来れば最高の旅になることは間違いありません。スケールが大きく自然が色鮮やかで、どこまでも清潔な感じです。

④ソグネ・フィヨルドは北欧ノルウェーにあります。フィヨルドと言うのはニュージーランドにもありますが、ソグネ・フィヨルドの方が遥かに素晴らしいです。

これはノルウェーのベルゲンの街です。ハンザ同盟都市でした。この港町の環境と雰囲気がとても素敵です。この街自体も世界遺産に登録されています。近くにはノルウェーが生んだ作曲家・グリーグ記念館がありますし、ロープウェイで昇った近くの丘の上からは素晴らしい眺望を楽しむことが出来ます。

このスライド写真はベルゲンの鉄道駅です。ここから列車がスタートします。途中には滝もあり鉄道も滝の前で止まってくれ、写真を撮らせてくれます。川の入り江みたいな終点のグドヴァンゲンまで列車で行き、そこから川を観光船で渓谷に入って進みます。その途中で両岸に素晴らしい雄大な景色を見ることが出来ます。オモチャのような団地みたいなものもあります。水は清澄にして、周囲の環境は空と水と森のコントラストが詩的ですし、心を洗われるような素晴らしいところです。

その他には先ほどお見せした南米の**⑤イグアスの滝**があります。

イグアスの滝では、この水辺まで歩いて行けるようになっています。ツバメが飛んできて、落ちてくる滝の水の中へ飛び込んでいくのです。滝の裏側で巣作りをやっている特殊なツバメですけれども、これが非常に印象に残っています。音としぶきがすごいです。ですから、この間イグアスの滝へ行く知人に何か参考になるアドバイスはありませんかと聞かれましたので、ゴムぞうりと短パンとビニール製雨合羽を持っていったらいいでしょうと勧めました。帰ってからそれらを取り揃えて準備していたのは自分だけだったけれどとても役立ったと喜んでいました。ここはとにかく音としぶきがすごいです。

トロントからナイアガラへ向かう場合でも、途中で風に乗ってしぶきが飛んできます。ジョーク好きなガイドさんが、「いやあ残念ですね、皆さん。雨が降ってきました」なんて、ちょっとからかいますけれども、実際は四六時中ナイアガラから滝のしぶきが飛んでくるというだけの話なのです。

９．「新・世界７不思議」選定の舞台裏

冒頭に触れましたが、「世界7不思議」というものがあります。世界7不思議というのは、フィロンというビザンチウムの人が、B.C.2世紀ごろに古代ローマと古代ギリシャ時代に造られた建造物の中から、価値ある建物物を7つだけ特別に選んで、それが今日まで延々伝えられた

ものです。ところが、今日この古代の建物がほぼ姿を消して存在していません。僅かに残っているのは、ギザのピラミッドだけです。これは現在も世界遺産になっています。あとの6つは、今は形としては残っていません。遺跡の跡地と形跡は残っていますが、肝心の建物本体がないのです。

近年になって、価値ある遺産として決めてあっても現実に見られないのではつまらないという声がしばしば聞かれ、スイスにある「新・世界7不思議財団」という団体が世界中からインターネットも含めて、あらゆる手段を使って「新・世界7不思議」に相応しい候補を投票してもらいました。その送られてきた投票用紙の中から、日本で七夕に当たる、「7」並びの 2007 年7月7日に、「新・世界7不思議」として7か所を選定致しました。

投票の結果、決まったのが、まず**①コロッセオ**です。それから、**②ペトラ遺跡**、そしてインドのアグラにある**③タージ・マハール**です。その他に、**④万里の長城**、**⑤チチェン・イッツァ**、**⑥マチュピチュ**、そしてもうひとつ、**⑦コルコバードのキリスト像**です。お陰様で私自身はすべて訪れることが出来ましたが、それぞれ興味深い世界遺産です。

この7つのリストを見たとき、率直に言ってコルコバードのキリスト像は、文化的遺跡の伝統的概念からかけ離れていてやや違和感がありました。他の6つはそれぞれ歴史的にも由緒のある史跡であるのに、なぜこんなに新しく遺跡とは呼べないようなキリスト像が選ばれたのでしょうか。

実際これが完成したのは、ブラジル独立 100 周年の 1931 年で、まだ 100 年も経過していません。どうしてこれが選ばれたのでしょうか。「新・世界7不思議」は、世界中からの投票によって選ばれましたが、その際異質性が入り込む余地があったのです。その是非は別にして、実は、投票の際恣意的な思惑が入ってしまいました。この投票に際して、ブラジル政府が国がかりで国民に電話料、通信料をすべて無料にまでして、国家の独立記念塔へ投票することを奨励したのです。その結果、1千万人のブラジル人が一斉に投票して見事コルコバードが「新・世界7不思議」に選出されたという少々釈然としない経緯があります。

タージ・マハールは、大理石建築物としての素晴らしさは申すまでもなく、シメトリーの庭園造形美が他の世界の庭園建築のモデルにもなっています。例えば、スペイン・グラナダにあるアルハンブラ宮殿です。これは、実は現地語ではアルハンブラではなく、アランブラと言います。正式にはアランブラ宮殿ですが、一般的に通りがいいのでここではアルハンブラと申し上げます。このアルハンブラ宮殿の中のスケールはタージ・マハールに比べれば、小さなものですが、中庭の噴水が有名なライオン宮殿、コマーレスの中庭、パルタール宮、これらがタージ・マハールを参考に設計されたと言われています。

タージ・マハールはムガール帝国皇帝シャー・ジャハーンが、愛するマハール妃の死を嘆き悲しみ亡き妃を偲んで造営したと言われています。実は、タージ・マハールに通じるメインストリートは、車では目的地まで行けません。バス・センターで降りて歩いて行くか、馬車に頼ります。そのメインストリートが「Dr.マツキ・ミヤザキ通り」と呼ばれる有名な通りです。道路傍に「宮崎松記」博士の名を冠した大きな石碑が建てられています。宮崎博士は、1972 年ニュー

デリーで墜落した日航機事故で、惜しくも亡くなられました。ハンセン病の、いわゆる昔でいうライ病院をこの地に建てて、献身的に現地の人々の医療にあたったことから、現地では非常に尊敬されている方です。

ところが残念ながらそういう立派な日本人医師が活動された事実が、日本ではほとんど知られていません。帰国してからインターネットで Wikipedia を検索しましたが、誇るべき宮崎松記博士と名誉あるストリート名については何の言及もされていません。この件についてあるところへ投書しましたら、幸い最近になって漸くその名が紹介され掲載されるようになりました。

10.「ビートたけしが選んだ新・世界７不思議」

もうひとつ、余興のような話題かも知れませんが、「ビートたけしが選んだ新・世界7不思議」というものがあります。これはテレビ東京が7年がかりで番組の中で毎年１つずつ世界の不思議な建造物を7つ選んだものです。

そして、今年１月４日に選定したものが7回目で最終回となりました。昨年までどんなところが選ばれたかと言いますと、**①ナスカの地上絵**（ペルー）、**②チチェン・イッツァ**（メキシコ）、**③モン・サン・ミッシェル**（フランス）、**④パルテノン神殿**（ギリシャ）、**⑤平城京**（奈良）、**⑥アヤ・ソフィア**（トルコ）です。

最初の年に選ばれたナスカの地上絵では、地上より空から見た方が意図が鮮明に表現されると思考したインカの人々の深遠なる哲学的知恵に脱帽です。

チチェン・イッツァとモン・サン・ミッシェルは、人気ツアー企画でもよくリスト・アップされます。他には、アテネのアクロポリスの丘のパルテノン神殿、奈良の平城京、そしてトルコ・イスタンブールのアヤ・ソフィアがありますが、平城京はちょっと身贔屓かもしれませんね。アヤ・ソフィアは、ボスポラス海峡を目の前にした美しいイスラム寺院建築です。

では、今年は7不思議の最後としてどこが選ばれたのでしょうか。

最終的に3か所が候補に挙がりました。エジプトの①クフ王のピラミッド、同じエジプトの②カルナック神殿とインドの③アダラジ・ヴァヴです。カルナック神殿は、ナイル川沿いのルクソールにあります。アダラジ・ヴァブは私も知らなかったので調べてみました。インドの宮殿で、地下深く下る井戸がちょっと特殊なもので一部には話題になっています。世界遺産ではありません。

この中から最終的にどこが選ばれたかというと、**⑦カルナック神殿**です。このカルナック神殿は周辺のルクソール神殿やハトシェプスト葬祭殿など巨大な建造物に比べても決してひけを取らない、古代エジプトの歴史を感じさせる素晴らしい建造物です。

以上7つが「ビートたけしの選ぶ新・世界7不思議」です。

ちょっと早足でお話致しましたが、約束の時間が参りました。ご静聴ありがとうございます。